

# 尼崎市立大庄公民館の謎

— 旧大庄村役場が語る物語 —

Some Secrets of Amagasaki Osho Public Hall

— What Story Does the Architecture of the Former Osho Village Office Tell? —

井上久夫\*

## Abstract

The former Osho Village Office (The present Osho Public Hall in Amagasaki) was built by Togo Murano in 1937. In those days it was known as the best building of all the Japanese village office buildings. However, the villagers did not understand the meaning of the architecture. For example, they did not understand what the reliefs, the griffin and the dove with an olive leaf, on the architecture mean.

Some villagers wanted to know about the meaning of the designs of their government office building. However, they missed their chance to ask Togo Murano the meaning of them. Even if they had had a chance to ask him, he would not have answered their questions about the Osho Village Office. He was an architect who did not talk about his works.

During the past twenty years, some architects and curators have come to the Osho Village Office in quest of the answer to the secrets of the architecture. They have found some of the answers to them, but some secrets are left hidden. I think the hidden ones are very important to understand the theme of the architecture. It is this theme that I would like to try to find.

キーワード：大庄村役場、村野藤吾、戦争、平和

## はじめに

尼崎市立大庄小学校の傍に一つの建造物がある。尼崎市立大庄公民館である。現在、公民館として地域の人々に用いられている建物だが、元来は大庄村役場として建てられた。それまでの木造の村役場が手狭になったことから1937年に新庁舎として建設された。その後、大庄村と尼崎市との合併により、大庄村役場は1942年に尼崎市役所大庄出張所となり、1947年には尼崎市役所大庄支所<sup>1)</sup>となった。そして、1969年に尼崎市立大庄公民館となり、現在に至っている。

ところで、著者がなぜ大庄公民館を取り上げ、門外漢である建築について語ろうとしているのか、そのことについて少し触れておきたい。著者は通学路の途中でいつもこの建物を眺めながら、大庄幼稚園、大庄小学校に合わせて8年間通い、その後も、

事ある毎にその建物を見てきた。しかし、何も見えていなかった。換言すれば、建物が語っている物語に耳を傾けることがなかったのである。

2007年7月10日付の毎日新聞に尼崎市立大庄公民館（旧大庄村役場）が写真入で大きく取り上げられているのを目にした。その後、友人の一人が著者を公民館見学に誘ってくれた。幼い頃から折に触れて見てきた建物が、このとき全く別の建物に見えたのである。大庄公民館がはじめて私に語りかけてくれたのである。いや、著者がはじめてその声に耳を傾けたのである。

著者はこの語りかけに、ことばでは表現できない感動を覚えた。この感動ゆえに、大庄公民館という建物が語っている物語を伝えることが使命であると感じ、筆を執らざるをえなかったのである。

かつて、19世紀のアメリカの作家ナサニエル・ホーソン(Nathaniel Hawthorne、1804~1864)は、

\* Hisao INOUE 教育学部教授

1) 大庄村役場は1942年に尼崎市役所大庄出張所となり、その後、尼崎市役所大庄支所と呼び名が変わったことはよく知られているが、名称変更の年代がこれまで記されていない。それで、大庄公民館職員の方に調べていただき、1947年であることが分かった。

短編「ラパチニの娘」(“Rappaccini's Daughter”)の前書きで、物語の著者オーベピーヌ(ホーソンのこと)と彼の作品の特徴を紹介した後、次のように述べている。

We will only add to this very cursory notice, that M. de l'Aubépine's productions, if the reader chance to take them in precisely the proper point of view, may amuse a leisure hour as well as those of a brighter man; if otherwise, they can hardly fail to look excessively like nonsense. (Hawthorne 92)

(このじつにおおざっぱな紹介に、ただ、次のことをつけ加えるにとどめておこう。すなわち、オーベピーヌ氏の作品は、たまたま読者がそれを「しかるべき視点」から眺めた場合には、より輝かしい作家の作品とおなじくらいに暇な時間を楽しませてくれるかもしれないが、もしそうでない場合には、ほとんどまったくたわごとのように見えてしまうものである、ということ。) (傍点筆者)

ホーソーンは、ここで、創作者が意図している「しかるべき視点」から作品を見ることの重要性を強調しているのである。

ところで、創作者(作家、建築家、作曲家、画家、彫刻家等)には、二つのタイプがある。一つは、自らの作品を完成させた後、作品の意味について公表するタイプ。いま一つは、隠蔽するタイプである。前者の場合は、ことあるごとに語り、書くゆえに、作品を読み解くための「しかるべき視点」を見出すことは容易であるが、後者の場合は、作品について解説することがないゆえに、その視点を見出すことは困難である。「しかるべき視点」への手がかりは、作品そのものしかないのである。したがって、後者に属する創作者の作品の「しかるべき視点」を見出すには、緻密な観察と分析と感性を手がかりとする以外に方法はないのである。

だが、そうしたからといって、見つけ出した視点果たして「しかるべき視点」なのかどうかは分からない。だとすれば、「しかるべき視点」を求める

ことは意味のないことなのだろうか。

かつて、志賀直哉は『暗夜行路』の「あとがき」で次のように述べた。

『暗夜行路』を恋愛小説だと云った小林秀雄、河上徹太郎両氏の批評がある。私には思いがけなかったが、そういう見方もできるという事はこの小説の幅であるから、その意味では嬉しく思った。所謂恋愛小説というものには興味がなく、恋愛小説を書きたいとは少しも思わなかったが、『暗夜行路』が若し恋愛小説になっているとすれば、それも面白い事だと思った。(志賀 572)

志賀直哉は、『暗夜行路』が、別のジャンルの作品として捉えられたことを「面白い」といって受け入れている。出来上がった作品には、創作者が意図していなかった要素が多々あり、時に、創作者が読者によって自らの作品の新たな側面に気づかされることもあるのだということが示されている。創作者の意図する「しかるべき視点」ではなく、それとは別の視点から作品が読み解かれたとしても、それを「作品の幅」であると捉え、肯定的に受け入れる創作者もいるのである。

旧大庄村役場を設計した村野藤吾は、先ほど述べたタイプでいうと明らかに後者に属する創作者である。すなわち完成した自らの作品については何も語らない建築家である<sup>2)</sup>。それゆえ、彼の意図する「しかるべき視点」を見出すには、建物そのものを詳細に観察、分析することがまず求められる。その結果が「しかるべき視点」であるか否かは誰にも分からない。ただ、村野藤吾が、創作者の意図する「しかるべき視点」とは異なる視点から見られ、語られたとしても、それを「作品の幅」として受け入れる創作者であることを願うばかりである。それでは、「しかるべき視点」を求めて、大庄公民館を眺めることにしよう。

## I

現在の大庄公民館は、1937年に、大庄村役場(兵庫県武庫郡大庄村の庁舎)として、その建造物の歴史をはじめるのである。この頃の大庄村は阪神工業

2) 『村野藤吾建築図面集 第4巻 公共の美 解説篇』(菊竹清訓、石田潤一郎他著、同朋舎出版、1991、p18)のなかで、大庄村役場の特質について語っている石田潤一郎は、「村野藤吾は、この建築については何も語っていない」と述べている。そして、村野が、わずかに『日本建築士』第24巻第3号の新作紹介欄に、「新興の工業地帯に新しく建つ役場として、近代日本の精神を発揚すべく設計せり」という言葉を残していることを付け加えている。

地帯の発展と相俟って、農村から工業都市へと変貌を遂げつつあった。それに伴い、人口は、その6年前に比べると約2倍の22,000人へと激増していた。人口と事業所の増加により、村の財政は驚くほど豊かになっていた。

当時大庄村は30~40万円の歳出規模であり、その村が役場建設に16万円を投じたのであるから、いかに多額の費用をこの建物に投入したかがうかがえる。ちなみにこの年度の歳出総額は約69万円であり、大庄村は余剰額で建設費をまかなえたことになる。「日本一裕福な村」といわれたゆえんである<sup>3)</sup>。

この村役場建設を依頼されたのが村野藤吾である。村野は、1891年に生まれ、早稲田大学建築学科を卒業後、大阪の渡辺節建築事務所に勤め、1929年に独立して村野建築事務所を開設し、1930年にヨーロッパ・アメリカへの研究旅行を行っている。そして、この5年ほど後に、大庄村役場を設計することになる。脂の乗り切った建築家と財政豊かな村とが建て上げた役場が大庄村役場なのである。村野が独立後、最初に設計した庁舎建築でもあり、その建築にかける意気込みは並々ならぬものであったことがうかがわれる。

新しい大庄村役場の敷地は約300坪で、東側の道路と西側のゆるやかな曲線を描く川に挟まれている。建物は敷地の北西側いっぱいまで寄せて建てられ、南側は広い庭園となっている。東側は道路から5メートルほど後退し、建物の東面から南へ向かって回廊が真っ直ぐに設えられている。

鉄筋コンクリート造、地上3階、地下1階建、塔屋付きの巨大な建物は、東側から見ると、「箱型のブロックの組み合わせによって構成されているが、それに対して西面は、川の流れをそのまま利用した、ゆるく弧を描く1階壁面の上に、次第に後退しながら箱型の二・三階が積み上げられている。」(西村 5) 外壁は、こげ茶色で、「現在では制作が不可能とされる塩焼き」(笠原 63)によって仕上げられている。また、壁面には複数の装飾が施されている。東西南北からこの建物を見ると、全く異なった姿を見せている。

では、この建物は当時、人々の目にどのように映っていたのだろうか。

「新築された村役場は村で一番高い建物で、三階の屋上変わった塔がそびえ、意味深長な彫刻像があったり、入口の上に鳥の石彫りがついていて、ちょうど外国の建物が大庄村に引越してきたみたいだとも言われていたそうだ。」(草薙 9)

「当時は若輩のため、役場新設のいきさつなど関心もなく、また設計者の村野藤吾という人を知る由もなかった。日に日に鉄筋の、でかい三階建ての建物が姿を現し外装はタイル張りではとや驚の彫刻が取り付けられ、屋上の塔の壁にはオリーブのデザインが彫られていた。ハイカラな建物にみな物珍しく、大庄村に西洋の建物ができた話の種になった。」(草薙 9)

「村役場が完成したときには、見学会が行われ、村民の大半が訪れた。古びた木造平屋の役場から一変して、田舎村にのっぽの鉄筋コンクリート三階建て、西欧風のモダンな建物が出現してみんなびっくりした。屋上にはなにやら怪しげな模様の塔がそびえ、「これがわしらの役場かいな」と、少し戸惑いさへ感じさせられた。ほかに、鷲とライオンの変身したような動物や、オリーブと鳩の石彫り、塔の天井の星模様、三本の国旗立て柱など、いくら考えてもわけのわからぬ村役場の七不思議ができた。それで、「設計者の村野さんに意味を聞いてみいや」という話になったが、結局誰も尋ねることなくそのままとなった。」(草薙 12~13)

当時、大庄村役場が役場としては日本一と言われ、村の人たちがそれを誇りとしていた様子うかがえる。それと同時に、斬新な建築物に戸惑っていた様子もうかがえるのである。

確かに、現在では、「鷲とライオンの変身したような動物」がギリシャ神話に登場するグリフィンで、強さを象徴する架空の生き物であることや、「オリーブと鳩の石彫」が旧約聖書の「ノアの箱舟」に登場する小枝を加えた鳩を指し、平和の象徴であることなど、少しずつ謎が解かれてきているように思われる。しかし、なぜ、グリフィンとオリーブをく

3) 尼崎市立地域研究資料館が2002年10月(平成14年10月)に発行している『地域史研究—尼崎市立地域研究史資料紀要—』第32巻第1号のなかに、小特集「近代建築遺産としての旧大庄村役場」が掲載されている。西村豪と草薙芳弘(3名の聞き取り調査を実施)が執筆している。それらの資料を参照させていただいた。

わえた鳩がレリーフとして選ばれる必然性があったのか、また、なぜオリーブをくわえた鳩を玄関の上に配す必要があったのか、等等、まだまだ、多くの謎に包まれている。ある意味で、当時の人々が戸惑った「七不思議」は今も残っているといえるのである。

## II

大庄村役場は日本一の役場として当時の人々に誇りと夢を与えた建築物であったが、年月が経ち、やがてその価値が忘れ去られてしまうようになる。大庄で生まれ育った著者も、物心ついた頃から数年前に至るまで、この建物の価値をまったく知らなかった。この建物を支所（1947年～1968年）、公民館（1969年～現在まで）としてしか見ていなかった。建物の意味など考える余裕が無かったのかもしれない。

1990年代に入って、ようやくこの建物に対して強い関心を抱く人々が再び現れ、その価値を形に残す作業が行われるようになる。たとえば、1991年に『村野藤吾建築図面集』の出版、2002年に『地域史研究—尼崎市立地域研究史資料紀要一』の発行、京都工芸繊維大学における研究、2003年の尼崎市教育委員会の文化庁への働きかけ（これにより国登録文化財となった）、2004年の『地域史研究—尼崎市立地域研究史資料紀要一』の発行、2005年の朝日新聞記事、2007年の毎日新聞記事、尼崎市立文化財収蔵庫の市民への働きかけ、などである。これらの働きがなければ、「大庄の宝」（草薙 14）の価値に気づく人々は今よりもはるかに少なかったであろう。これまでの誠実かつ真摯な取り組み、研究のおかげで、その宝が今も光を放っているのである。

さて、この章では、まず初めに、これまで言及されてきた大庄村役場の外観の特徴をまとめて呈示し、次に、建物が著者自身に投げかけてきた謎を示すことにする。

大庄村役場の外観の特徴は、これまで大きく次の三つに分けて述べられてきた。1. 「装飾とレリーフ」、2. 「窓の形」、3. 「建物全体の形」である。

### 1. 装飾とレリーフについて

装飾に関しては、塔屋の天井には、雲、星、太陽をかたどった装飾があり、塔屋の東西の側面には、

オリーブの木の透かし彫りがあることが、そして、レリーフに関しては、建物の入口上部にオリーブの枝をくわえた鳩が、南側外壁にはグリフィンがあることが述べられている。特に二つのレリーフについては、必ず解説が加えられている。すなわち、オリーブの小枝をくわえた鳩は、「ノアの箱舟」に登場するオリーブの葉をくわえた鳩に由来し、「平和」の象徴であり、一方グリフィンは、ギリシャ神話に由来する怪獣で、鳥と獣、それぞれのなかで最強の鷲とライオンを合体させた架空の生き物で、「強さ」の象徴である、という解説がなされている。

### 2. 窓の形について

東西南北の外壁に施されている窓の形が異なっている点が指摘されている。それまでの庁舎建築では、その基本として、シンメトリックが中心であったため、その多様な窓の形が特徴として言及されているのである。

### 3. 建物全体の形について

既に述べたが、建物が川の流れをそのまま利用した、ゆるく弧を描く1階壁面の上に、次第に後退しながら箱型の二・三階が積み上げられており、それゆえ、東西南北からこの建物をみたととき、異なった形に見えることがその特徴として述べられている。また、特に北西から見たときの建物の威容さがその特徴として言及されている場合もある。

以上が、これまで紀要、雑誌、新聞などで指摘されてきた大庄村役場の外観の特徴である。

著者はこれらの特徴のいくつかを知った上で、現大庄公民館を訪れ、感動したのであるが、その外観は、感動と同時に、いくつかの謎を著者に投げかけてきた。その謎とは、次のようなものである。

### 1. 装飾とレリーフについて

装飾に関しては、塔屋の東西の側面にはオリーブの木の透かし彫りが施されていることは指摘されているが、その端に彫られている箱を積み重ねた装飾（写真1）<sup>4)</sup>が何であるのか、また、その装飾の内、二つだけに穴があいてあるのはどういう意味なのか。

レリーフに関しては、鳩（写真2）とグリフィン（写真3）のレリーフの象徴的意味は分かっているが、ではなぜ、鳩のレリーフが建物東側の正面入口

4) 写真1～5は尼崎市教育委員会から提供していただいた。



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5

の上に置かれ、グリフィンが南側の外壁に置かれているのか。

### 2. 窓の形について

東西南北の外壁に施されている窓の形が異なっている点は指摘されているが、東から見て、塔のすぐ右隣にある窓枠（写真4）が、他の窓枠と全く異なっているが、それは、何を意味しているのか。

### 3. 建物全体の形について

毎日新聞では、「周囲を一周すると、かつて水路が隣接していた西側は、流れにそって1階の外壁が

緩やかな円弧を描いていた。2、3階はブロックのように箱型になって積み上げられており、下から見上げるとまるで巨大軍艦のような威容に驚かされる」と書かれているが、巨大軍艦（写真5）をイメージさせることで何を語ろうとしているのか。

以上が著者に投げかけられた謎であるが、これらの謎を次章で解くことにする。

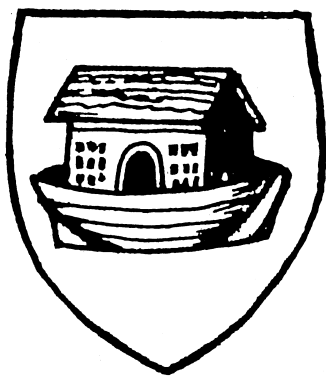


図1

## III

前章の1. の謎を解くことから始めたい。塔屋の側面を丁寧に見ると、オリーブの木だけではなく、確かに、右端に箱型の模様が設えられており、さらに、その箱の2箇所にて穴が開けられている。これまでの解説では、「オリーブの木」は取り上げられているが、この箱らしきものについて、また2箇所にあけられた穴については触れられたことがない。

著者は箱に空いたこの二つの穴を見つめていたとき、そこからオリーブの木をくわえた鳩とグリフィンが飛び出してきて、それぞれがレリーフとなって止まっている、と直感的に思えたのである。なぜ、鳩が建物の正面入口の上で、グリフィンは南側の外壁に止まっているのか、その理由は後で述べるとして、二羽の鳥が飛び出してきたその塔屋の箱はどのような意味を持っているのかをまず考えてみたい。

興味深いことに、この箱の形は、『イメージ・シンボル事典』（ド・フリース 28）の「箱舟」の項目に掲載されている挿絵の船の上部胴体部分（図1）と非常に似ていることが分かる。紋章としても用いられてきたことを考えると、箱舟の上部胴体部分をそのような形で示すことは不自然ではないということになる。だとすれば、2箇所の穴はノアが箱舟から異なる2種類の鳥、すなわち鳥と鳩を放ったことを暗示しているように思われるのである。旧約聖書のノアの箱舟に関する記事を詳しく見てみたい。

ノアの時代、人々は堕落と暴虐に満ちていた。神はそのことを残念に思い、新しい世界を作るために、ノアとその家族に箱舟を作らせ、動物と鳥と一緒に箱舟に入るように命じた。四十日四十夜雨が降り、大洪水となった。やがて大雨は止んだ。水が地の表から引いたかどうかを確かめるために、まず鳥

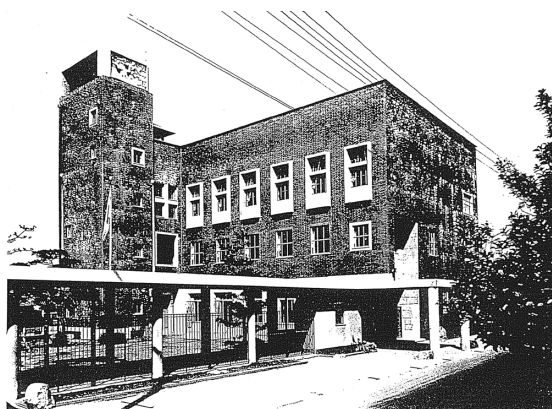


写真6

を、次に鳩を放った。しかし、どちらも船に戻ってきた。その後、再び鳩を放った。鳩は夕方になって戻ってきた。鳩はオリーブの若葉をそのくちばしにくわえていた。さらにその後、ノアは鳩を放った。鳩は戻ってこなかった。ノアは水が地上から乾き始めたことを感じた。やがて、箱舟のおおいを取り去って、眺めると、地の面はかわいていた。そして、ノアは箱舟に乗っていたすべてのものとともに、箱舟から降りた。（新改訳聖書創世記6～8章参照）

村野藤吾がノアの箱舟の物語を意識し、その一場面をレリーフと箱舟のイメージの浮かし彫りで表現しようとしたことは明らかであろう。ただ、問題は、鳥のレリーフではなく、グリフィンのレリーフを用いている点である。だが、考えてみれば、創作者たるもの、古典の一場面をそのまま用いて、自分の想いを表現するはずがない。古典を参考にしながら新しい物語を創作し、それによって、自らの想い、自らのテーマを表現するのが自然であろう。私には、塔屋の箱は箱舟をイメージしながらも、箱に開けられた二つの穴は、一つは鳥ではなくグリフィンが放たれた穴であり、もう一つは鳩が放たれた穴であると捉えざるを得ない。そして、鳥ではなく、グリフィンでなければならないところに村野の意図がある。その意図とは何か。それについては、後ほど述べることにする。

さて、次に、前章の2. の謎の解明に取りかかる。

様々な窓の形がこの建物の特徴なのだが、とりわけ気にかかる窓の棧が塔のすぐ右隣にある。

現大庄公民館の正面から建物を眺めると、不思議な窓があることに気づく。棧が威容に太いのである。大方の読者は（写真4）を見ればそのことに気づくであろう。それはまさに十字架である。だが、現大庄公民館は大庄村役場竣工から72年程経ってい

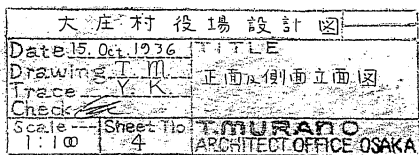
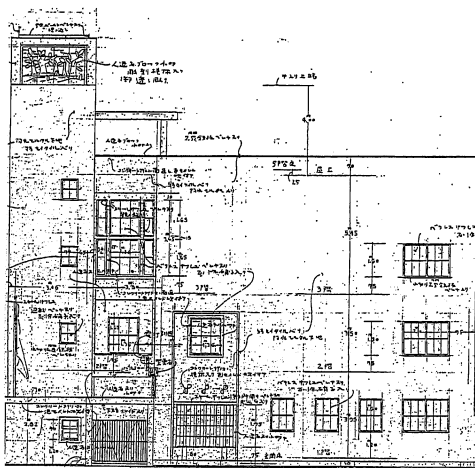


図2

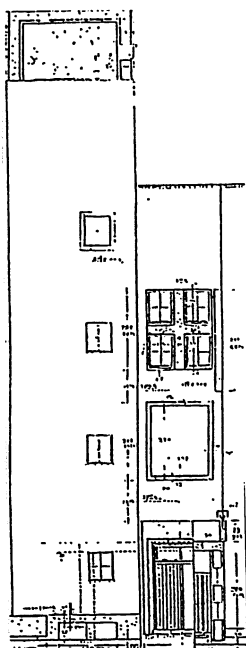


図3

ることを考えると、窓の修理、修復等によって原形が変わり、現在のような窓の形になったかもしれないという疑問が起ってくる。しかし、竣工当時の写真(写真6)<sup>5)</sup>と比較してみると、はっきりと分かるように、現大庄公民館の窓の棧と同形である。ところが、設計図の正面立面図(図2)<sup>6)</sup>で窓の棧

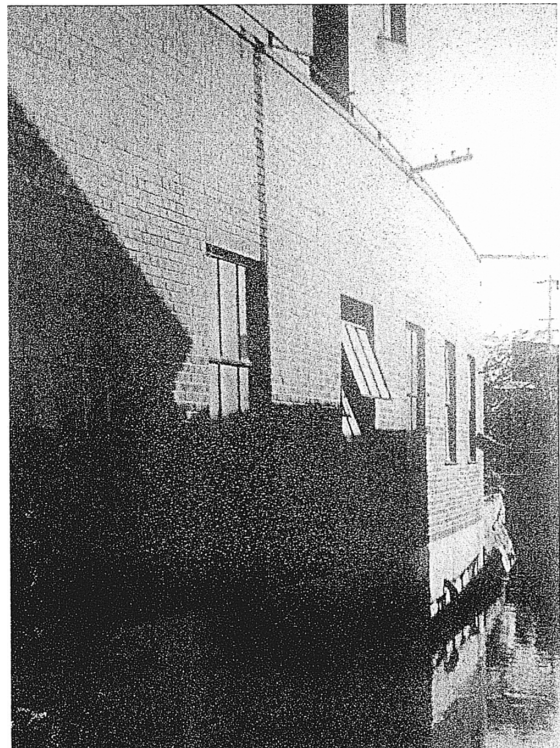


写真7

を確かめてみると、その窓は異なる形に描かれていることに気づく。このことは、村野藤吾は、1936年10月15日の時点で考えていた窓の棧の形を、その後、外部タイル割り詳細図(図3)<sup>7)</sup>を描く段階で大きく変更したことになる。十字架はなぜ必要だったのか。それについては、後で述べるとして、これまで、なぜこの窓がこれまで取り上げられることがなかったのか不思議である。それはそうとして、次、前章の3.の謎解きに取りかかる。

著者が改めて現大庄公民館を北西から眺めたとき、「船だ!」と思わず叫ばざるをえなかった。建物の西側1階の外壁が緩やかな円弧を描いており、それが船のボディーの緩やかな曲線を彷彿とさせたからである。視点さえずれていなければ、誰しもそう思えるように造られている。しかも、その船は、箱舟のイメージである。旧約聖書の創世記による記述、また、その映画化によって植え付けられたイメージ、また、イメージやシンボルに関する事典に掲載されている箱舟の絵などの影響によって、ある程度そのイメージが固定化されているためであろうが、著者には箱舟を瞬間にイメージできたのであ

5) 『村野藤吾建築図面集 第4巻 公共の美 解説篇』の口絵の2枚目に当たる写真を複写させていただいた。  
 6) 『村野藤吾建築図面集 第4巻 公共の美 図面篇』PP.96~97  
 7) 『村野藤吾建築図面集 第4巻 公共の美 図面篇』P.118

る。そればかりではない。公民館が水の上に浮かんでいる箱舟(写真7)<sup>8)</sup>に見えた。それは、幼い頃に、公民館の西側にかなり大きな水路(2メートル以上の幅)があったことを覚えていたからであろう。村野藤吾はこの水路の湾曲を見事に利用したのである。この水路はとっくの昔に道になっているので、当時を知らない人々には、船をイメージできたとしても水の上に浮かぶ船をイメージすることは難しいかもしれない。

箱舟に見えた船は、ブロックのように積み上げられている2階、3階へと目を移していくと、今度は巨大軍艦に変身する。軍艦に見えたのは、毎日新聞の記事をすでに目にしていたゆえであろう。そのおかげで、著者には、大庄公民館が「巨大な箱舟」にも「巨大な軍艦」にも見えたのである。そして、箱舟に見え、軍艦に見えたことが、先ほど保留した三つの謎を解き明かす上で重要な意味をもってくるのである。

#### IV

大庄村役場が竣工されたのは1937年である。1931年に満州事変、1936年に2.26事件、1937年に日中戦争突入、1939年に第二次世界大戦勃発、1941年に米英に対して宣戦布告、そして太平洋戦争へと続く。まさに軍国主義の時代、戦争の時代に建てられたのである。

大庄村役場を「戦争の時代」に置いてみると、建造物全体は、まさに「巨大な軍艦」に見え、レリーフのグリフィン、一般的な「強さ」を象徴するだけでなく、空飛ぶ鷲からイメージされる「空軍」および陸を駆け巡るライオンからイメージされる「陸軍」をも髣髴とさせるのである。「巨大な軍艦」は「海軍」、強さの象徴であるグリフィンは「空軍」「陸軍」と結びつき、それらは「戦争」という二文字を弥が上にも強く意識させるのである。

だが、もう一方で、大庄村役場は、すでに述べたが、建物全体の姿やオリーブの葉をくわえた鳩のレリーフ、塔屋の箱を通して、ノアの箱舟の物語を浮かび上がらせ、「平和」という二文字を強く意識させるのである。

尼崎市立大庄公民館(旧大庄村役場)は、「巨大な軍艦」・「グリフィン」・「戦争」対「ノアの箱舟」・

「オリーブをくわえた鳩」・「平和」という相反する概念を同時に読み取れるように設えられているのである。

村野藤吾が戦争と平和についていかなる考えを持っていたのかは分からない。ただ、戦争ではなく平和を強く願っていたことは確かである。それは、二つのレリーフの位置を見れば分かる。グリフィンは人々が入り出す入口の上ではなく、南側の壁に、しかも、愛の象徴である十字架を睨み付けるように据えられている。まさに、グリフィンは迫害と魂を盗み取るサタンの象徴としての役割を果たしているのである。(ド・フリース 301) 一方、オリーブの枝をくわえた鳩が据えられているのは人々が入り出す正面入口の上である。そして「鳩のレリーフ」の前方には、子どもたちが通う大庄小学校がある。レリーフがこの位置にあることを思うと、それはまさに、大人たちに、そして、子どもたちに平和があるようにという祈りと願いの表現であると捉えざるをえないのである。

#### おわりに

大庄公民館(旧大庄村役場)は、しかるべき視点から眺めるとき、建物の外観(塔屋の装飾、レリーフ、窓など)が私たちに「戦争」と「平和」というテーマを語っていることに、そして、「平和」を最も重要なキーワードとして語っていることに気づく。

今後も多くの人々が関心をもってこの建物と対峙し、建物の語る新たな物語を聞き取り、それを知らせてもらいたいと願っている。大庄公民館にはまだまだ多くの謎が残っているからである。

#### 謝辞

友人の一人である中田明義氏が著者を大庄公民館見学へ誘ってくれていなければ、おそらく、この建物の外観を詳細に調べることはなかったであろう。また、尼崎市文化財収蔵庫学芸員の桃谷和則氏の励ましがなければ、活字にすることはなかったであろう。その他、尼崎市立大庄公民館の職員の方々をはじめ、多くの方々に協力していただいた。ここに感謝の意を表します。

8) 『村野藤吾建築設計図展カタログ4』P.129に掲載されている写真を複写させていただいた。



## 〈引用文献〉

- 笠原一人 2004「村野藤吾の旧大庄村役場をめぐって—建築史の立場から—」『地域史研究—尼崎市立地域研究史資料紀要—』第33巻第2号 尼崎市立地域研究資料館
- 志賀直哉 1990（2007 36刷改版、2009 39刷）『暗夜行路』新潮文庫
- 西村 豪 2002「旧大庄村役場（現大庄公民館）について」『地域史研究—尼崎市立地域研究史資料紀要—』第32巻第1号 尼崎市立地域研究資料館
- 草薙芳弘 2002「聞き取り調査 大庄村役場の回想」『地域史研究—尼崎市立地域研究史資料紀要—』第32巻第1号 尼崎市立地域研究資料館
- 菊竹清訓、石田潤一郎他 1991『村野藤吾建築図面集 第4巻 公共の美 解説篇』同朋舎出版
- 村野、森建築事務所 1991『村野藤吾建築図面集 第4巻 公共の美 図面篇』同朋舎出版
- 京都工芸繊維大学美術工芸資料館 村野藤吾の設計研究会編集・発行 2002『村野藤吾建築設計図展カタログ4』
- 毎日新聞<夕刊>、2007年7月10日（文・写真 平野幸夫編集委員、追憶の兵庫ヘリテージ14 尼崎市立大庄公民館（旧大庄村役場））
- ド・フリース・アト著 山下主一郎他訳 1984『イメージ・シンボル事典』大修館書店
- 聖書 新改訳 1970 日本聖書刊行会
- Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Edition of the Works of the Nathaniel Hawthorne Volume X: The Moses from an Old Manse*. Columbus: Ohio State UP, 1974.